

ピーテル・ヤンスゾーン・サーンレダムの教会堂内部画 —— 1648 年作《ハールレムの聖バーフォ聖堂身廊と大オルガン》の独自性とその意義

高野 明子 (慶應義塾大学)

17 世紀前半に活動したオランダの画家ピーテル・ヤンスゾーン・サーンレダム (Pieter Jansz. Saenredam, 1597-1665) の創始した絵画主題「教会堂内部画」は、17 世紀オランダ絵画の重要なジャンルをなすものである。

建築物を絵画の対象とすることは古くから盛んに行われてきたが、現実に存在する建築、それも教会堂の内部という空間を独立した絵画主題としたのはオランダにおいてサーンレダムが初めてであった。それだけでなく、人物や風俗画の要素を可能な限り排除し、純粋に建築そのものを専門として描き続けた存在は 17 世紀オランダを通じてサーンレダム一人である。

サーンレダムは、彼がその生涯のほとんどを過ごした町ハールレム最大の教会堂である聖バーフォ聖堂を繰り返し描いた。それらの作品には、名高いこの教会堂を擁する画家在住の町を礼賛するという作者の意図があったのではないかと考えられる。特に、代表作である《ハールレムの聖バーフォ聖堂身廊と大オルガン》(1648) は同聖堂を描いた他作品と比較した際、奥行きと高さを強調したその構図や遠近法の操作に大きな差異を認めることができる。一見すると教会堂の正確な写しであるかのような印象を鑑賞者に与える本作品であるが、実際はそうではなく、現実の教会堂よりも建物の高さや奥行きを大きく誇張している。聖堂の規模を更に大きく見せるための操作としては、交差部の天井アーチ装飾が縦方向に引き伸ばされており、さらに、画面右端のオルガンなど、画家が視点をとった位置から通常では視野に入ることのない聖堂内の事物が画面に収められている。これは、当時の実景により近いと考えられる下絵素描との比較からも言うことができる。

聖バーフォ聖堂を繰り返し描いた画家が、その他の作品において本作品のように建物の規模を強調するような操作を行った例は見られない。このような表現をとった画家の意図を検討することを、本発表の主な目的とする。

本作品には、サーンレダムが元々パトロンとしての関係を有していた総督秘書官コンスタンティン・ハイヘンスを介して、時のオランダ総督ウィレム II 世 (在位 1647-1650) への売り込みを図るという野心がこめられていた。結果的にその目的は達成されなかったものの、本作品は後に、オランダ政府によるイングランド国王チャールズ II 世への美術品贈呈 (1660) の目録に加わるという対英外交に利用されることとなる。

本作品には、上記のような公共的用途に供するという画家の野心が存在した。本作品が他に見られない構図を持つ理由は、その意図を十分に達成するためであったと考えることができる。画家の在住した街のシンボルと呼ぶべき存在である聖バーフォ聖堂の規模と荘厳さを、過去の画家が試みたことのなかった方法で描くことによって称揚するという画家の目的があったのではないかと考察する。